

指導行政のポイント

なぜ“読解力”の成績が上がったか

菱村 幸彦

昨年末、2009年に行われたOECDの学習到達度調査(PISA2009)の結果が発表された。その内容については新聞やテレビで報道されているので、ここでは繰り返さない。1つだけ読解力の成績について取り上げたい。

「朝の読書」運動の成果

読解力の成績は、前回(2006年調査)15位であったのが、今回8位に上昇した。2000年にPISA調査が始まって以来、調査のたびに読解力の成績が下降していたから、まずはひと安心といったところか。

では、なぜ読解力の成績が上向いたのか。以下に、その要因について考えてみよう。

第1は、新指導要領の影響。PISAは、義務教育を終えた15歳の生徒を対象としている。2009年に15歳となった高校1年生は、「ゆとり教育」の元と批判された1998年版の指導要領に基づく授業を受けてきた生徒たちである。したがって、今回の成績には新指導要領の影響はない。ただ、新指導要領は小・中・高校の全教科を通して言語活動の充実を求めている。これが本格的に実施されるようになれば、今後PISAの成績に好影響を及ぼすことが期待される。

第2は、学力向上の取組み。1998年版指導要領の告示以来、ゆとり教育批判がかまびすしくなった。これに対応するため、文科省は、2002年に「学びのすすめ」で確かな学力の定着を求め、2003年にはその趣旨徹底を図って指導要領の一部を改正した。さらに2006年の教育再生会議のスタートで学力論議が活発となり、各教育委員会は学力向上に向けた取組みを行った。こうしたなかで教員が学力向上に熱心に取り組んだことが、今回の成績につながったことは疑いない。

第3は、「朝の読書」運動の普及。1980年代から始業時間前に「読書の時間」を設ける運動が広がった。現在、全国の小学校の9割で朝の読書活動が行われているという。こうした読書活動が児童・生徒

の読書の習慣づくりに大きな影響を与えたことは間違いない。鈴木文科副大臣も、記者会見で「(読解力の成績向上は)朝読をはじめとする読書習慣が増えたことが大きかった」と述べている。PISAの付随調査でも「読書は大好きな趣味の1つだ」「本の内容について人と話すのが好きだ」等の項目に肯定的に回答した生徒の割合は、2000年の調査に比べて高くなっている。これは朝の読書運動の成果であろう。

高い無答率が日本の弱点

第4は、全国学力調査の影響。2007年から始まった全国学力調査では、PISA型学力を踏まえた「活用」に関するB問題を出題している。多くの教育委員会や学校は、全国学力調査の結果を子細に分析・検討して、指導法の改善と充実に努めているから、全国学力調査が小・中学校の読解力指導に影響を与えていることは疑いない。全国学力調査の影響は、むしろ今後のPISA調査において、より明確に出てくるものと思われる。

第5は、言語活動の充実。読解力調査で、日本の生徒に特徴的なことは、「無答率」が高いことだ。多岐選択形式の問題についての無答率は低い。自由記述形式の問題については他国に比して高い。例えば、今回出題された「携帯電話の安全性」に関する記述問題の無答率をみると、成績1位の上海が9.3%、2位の韓国が11.6%であるのに対し、日本は26.1%と際立って高い。ここに日本の生徒の弱点がある。新指導要領の実施によって、全教科を通じて言語活動が強化され、日本の生徒の弱点が克服されれば、読解力の成績はさらに上昇することが期待できる。

なお、余談ながら、PISAの読解力調査では、65カ国すべてにおいて、女子の得点が男子の得点よりも高い結果となっている。なぜなのか。この点についてはまだ確たる答えは出ていないようだ。

(ひしむら・ゆきひこ = (財)学習リサーチ情報研究所 理事長)

●最新刊発売! 25人の校長の臨場感あふれるとっておきの式辞! A5判/192頁/定価2415円

『小学校・中学校入学式・卒業式に贈る校長式辞』大澤正子・輿水かおり【編】

教育行政からみた体験的戦後教育史『戦後教育はなぜ紛糾したのか』菱村幸彦【著】